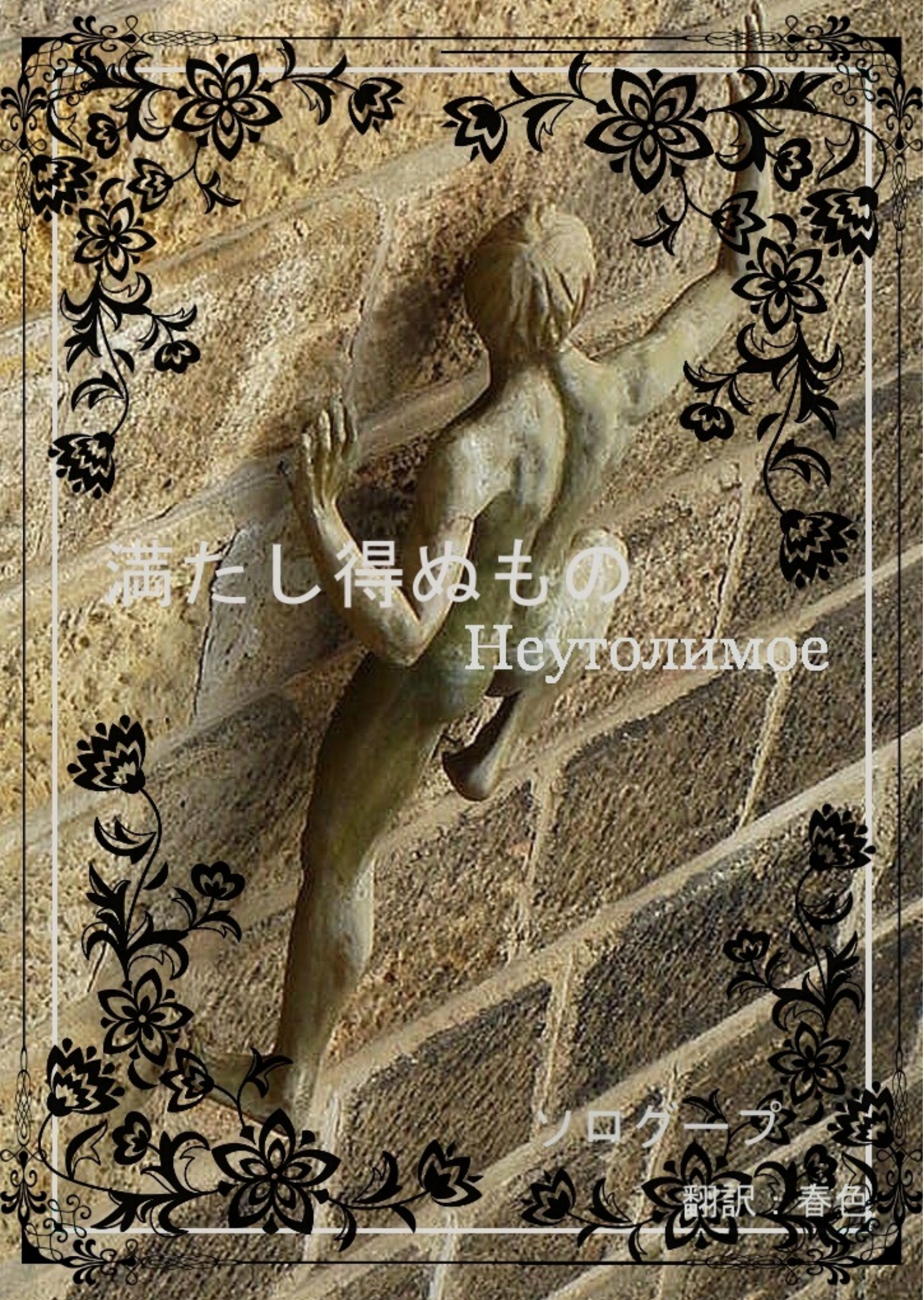


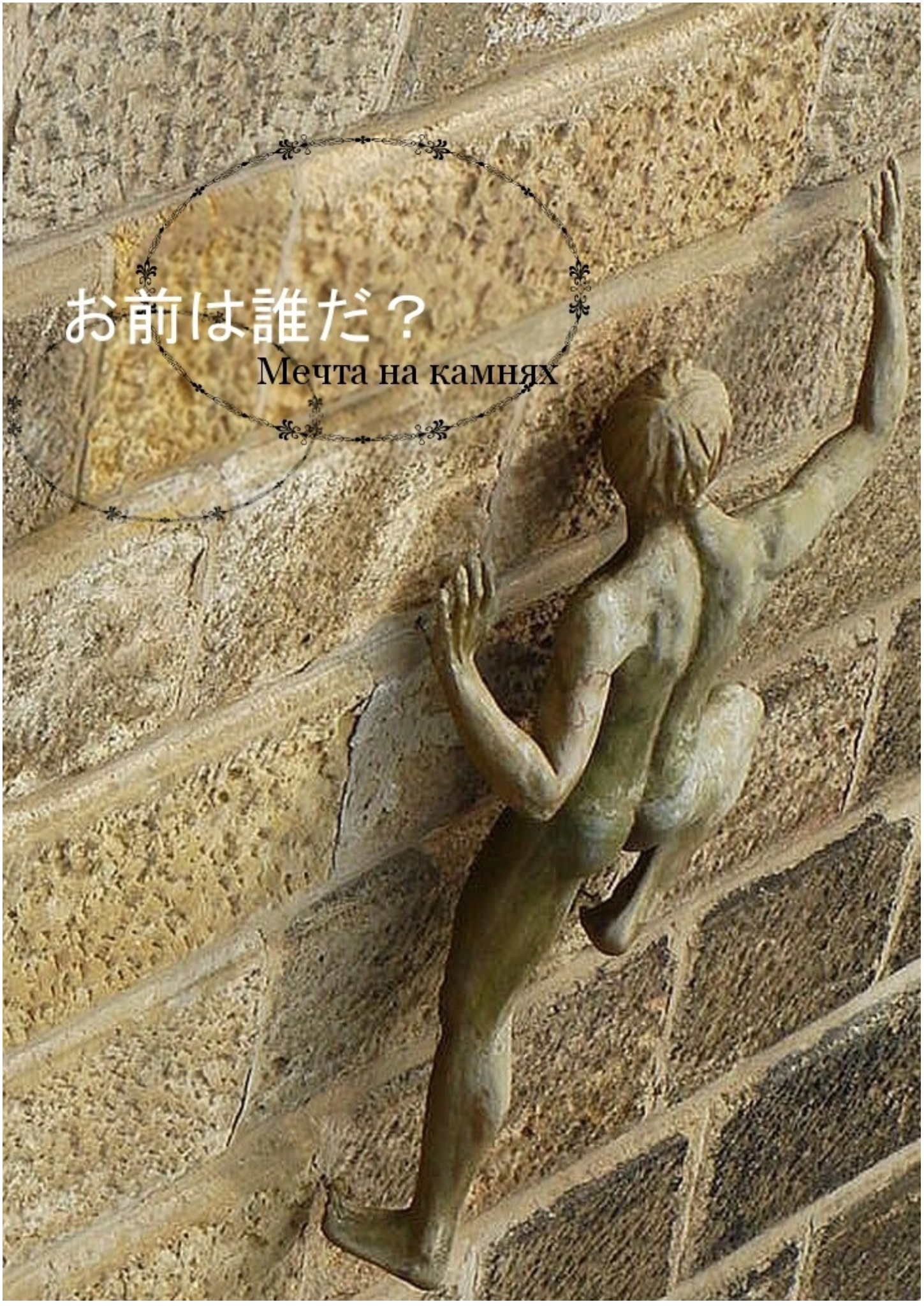
# 満たし得ぬもの

## Неутолимое

ソログープ

翻訳：春色

# お前は誰だ？


お前は誰だ？
Мечта на камнях

# 1

月日は刻々と過ぎゆき、世代は積み重なって行く。人間には明かされていないものがある。それは世界の秘密だけではない。更に重要な人間の魂の秘密もだ。問い続けても、経験を重ねても、一向に答えは見つからない。賢き人とて、子どもと同じく知らないのだ。こう問うことすらも、全ての人々に出来ることではない。

「一体私は誰なんだ？」と。

五月の末。巨大な町は既に暑さの中にあった。狭い横町は鬱陶しい暑さで。中庭となればなお一層であった。太陽は朝から明るく。狭い庭を囲っている石造りの五階建ての翼棟の上にある赤褐色をした鉄の屋根と。棟の汚い黄色い壁。ゴミだらけの舗装道路の巨大な建築用の石材とを高温に熱していた。横町にあるこの建物の隣では。同じように不格好で巨大な。新たな様式を取り入れた結果。馬鹿げた正面を持つこととなった新しい建物が建設中であった。その影響で、苦くてざらざらとした石灰の香りと。煉瓦の乾燥した塵とが中庭へと流れ込んでいた。

門番や女中。更に庶民階級である間借人の子ども達が。中庭で大声を上げて走り回っては喧嘩をしていた。十七号室の料理女アヌーシュカの十二歳になる息子グリーシュカは。台所から彼らを見ていた。四階の窓の枠に腹這いになり、短い青いズボンの中でその細い裸足の脚を真っ直ぐに伸ばして。

母は今日。グリーシュカを外に出してはやらなかった。それは気まぐれのせいなのだった。昨日グリーシュカが茶碗を割ってしまったことを彼女は思い出したのだ。とは言えど。彼はこのことで既に叩かれていたのだが、それでもアヌーシュカはこの出来事を今日再び彼に思い出させたのであった。

「全く悪いことばかりするんだからねぇ。彼女はそう言った。「中庭で走り回る必要なんて無いよ。家に居な。授業の復習だって出来るだろうしねぇ。

「僕には試験はないんだってば。誇らしげにグリーシュカが言った。

自身の学校での勝利について思い出す時にはいつだって、彼は嬉しげに笑うのだった。しかし母は彼を厳しく見て言った。

「試験がない？　それでも座っておいで。撲たれない内にね。どうして歯を見せているんだい？

もしも私がお前と同じ立場にいたら。笑うことなんてできやしないよ。

グリーシュカには奇妙に思えるこの台詞を。アヌーシュカは好んで都度口にした。裁縫師であった夫が死んで以来。女中として住み込みで働かざるをえなくなった彼女は。自身とグリーシュカのことを不幸だと信じ込んでおり。自分とグリーシュカの未来について。これを常に不幸なものとして暗い世界の中に描き出すのだった。グリーシュカは笑うのを止めた。気詰まりになってきたのだ。

とは言え。彼は庭に出たいとは思ってはいなかった。彼は家に居ても退屈しないのだった。まだ読んでいない挿絵付きの本があったので。それを手に取った。しかし読んだのは短い時間だけであった。窓台の上によじ登り、子供たちに見入った。その後には、軽い頭痛を追い払いながら。空想を始めた。

空想することーーこれはグリーシュカにとって楽しい行為であった。彼は様々な方法で。様々なことについて空想した。空想と自分。そして世界をも色々と作り変えても。その空想の中心には常に彼自身がいた。眠るために横になりながらも。グリーシュカはいつも空想をしていた。何か心地よく。喜ばしく。少し恥ずかしくて。気味が悪く。時には怖ろしいことについても。そうしてそのまま大いに心地よく眠りに落ちるのだった。例え日中に不愉快なことがあったとしても。昼間はしばしば不愉快なことに見舞われる少年は。台所で成長したのだった。貧しくて怒りっぽく気まぐれで。自分の運命に不満を抱く母親の元で。不愉快なことが不愉快であればあるほどに。空想はますます甘美な慰めとなった。頭を掛け布団の中に突っ込みながら、恐ろしい何かを思い描くことは。不気味でもあり且つ愉快でもあった。

朝。目覚めたグリーシュカはゆっくりと起床した。彼が寝ている廊下は。台所から女主人の部

屋まで伸びていた。その場所は暗く、息苦しいほどに暑苦しかった。そこに置かれている箪笥の上一面に敷き詰められたグリーシュカのベッドは、主人のスプリング入りのマットレスほど柔らかくはなかった。主人が不在の折りに母親の目を盗んで、彼はそのベッドで時々寝っ転がっていたのだ。しかしそれでも、彼の寝床は居心地が良くて落ち着いていた。学校に行く時間だと思い出したり、授業のない日に起きろと怒鳴られるまでは。だがその頃には、小店に買い物に行かされたり、何かしらやらされることもよくあった。しかし用がなければ母親は彼のところには来なかった。それは息子が寝ていることを彼女はとても嬉しく思っていたからだ。寝てさえいれば、彼にうんざりさせられたり、脚の周りを動き回られたり、視界にしゃしゃり出て来られることもないのだから。

「お前が居なくたって、憂鬱だのにィ」。そう彼女は息子に繰り返し繰り返し言うのだった。

そのおかげで朝はよく、存分に長い時間ベッドの上にグリーシュカは横になっていられた。一年中同じぼろぼろの綿の掛け布団は、その甲斐で夏や、それはしばしばあることだが台所が強く熱せられるその度に、非常に暑くなるのだった。だがその下で彼はくつろいだ。彼は再び空想を描いた。何かしら楽しくて愉快で喜ばしい、けれども決して恐ろしくはないことについて。

日中のどんなに小さな出来事ですら、グリーシュカの中に様々な空想を引き起こした。彼の気に入った話、教科書に載っていた面白い童話、同じく、教師によって管理されている生徒のための図書館から週に一度貸し出されるボロボロになった本の中の興味深い小説、母親のために読み上げさせられた新しい小説の中の好奇心をそそる事件、彼の想像力を動かす誰かから聞いたこと、それらをグリーシュカは自己流に、自分の空想へと作り替えた。

通っている都市の学校での勉強は、彼にとっては難しくはなかった。が、成績は平凡であった。何故なら、暇がなかったのだ。あまりにも多くの空想で忙しくて！　そのト、アヌーシュカは暇な時には縫い物や編み物の傍らで、グリーシュカに小説を読ませるのだから。彼女は小説の大の愛好家ではあったが、読み書きの教育を受けてはおらず、冒険小説を聞くことの方を好んだ。シャーロック・ホームズの冒険と『幸福の鍵』を愛好し、その一方でディケンズやサッカレー、エリオットなどの昔からの小説も好んで聞いていた。アヌーシュカはこれらの小説を自分の女主人から、または十四号室の専門学校に通う令嬢、ヴェルビツカヤやナグロツカヤの本を時間を忘れて夢中になって読んでいる、のところから手に入れていた。アヌーシュカは読んだ本の全てを大層しっかりと記憶しており、それらを詳細に語ることが好きだった。その相手となるのは友人達、女什立屋のダーシャ・スタリナヤ・グリューチや、三号室の将軍の女中であるアマンダであった。夕方になるとよく、グリーシュカは台所の木製の白いテーブルの上に礼儀正しく肘を寝かせ、更紗の水色のシャツの中の痩せた胸をテーブルに寄り掛からせ、床まで足りないまるで研がれた紡錘の如く細い脚をテーブルの下で組んで、彼は読んだ。素早く大声で、よく響くように。しかし、恋の場面となると興奮した。危険で困難なシチュエーションは、彼の興味を大いに引いた。だが愛あるいは嫉妬、優雅なページ、優しくて熱烈な言葉、腹黒い人間に邪魔された恋する幸福の苦痛と苦悩となると、それ以上だった。

空想の中でグリーシュカがいつも思い描くのは、微笑を湛えて優しいが時には残酷でもあるとても美しい令嬢たちと、金髪で青い眼をしたすらりとした小姓たちのことであった。とても美しい彼女たちはとても優しく微笑み、とても甘くキスをする真っ赤な唇と、表現豊かでとても愛らしい一方で、時としてとても残酷な言葉とを有していた。更に彼女たちは長く細い指を備えた白い優美な腕をしていた。その腕というのは、優しいがしかし時として一人の人間が他者に与えることの出来うる全ての幸福と苦痛とを、あまりにも強烈に容赦なく与えるのだった。可愛いらしい小姓は明るい巻き毛を肩の上まで長く垂らし、その水色の瞳は輝いていた。先の尖った短靴に白い絹の長靴下を履いた脚はふっくらとしており、スタイルが良かった。空想の中で聞こえるのは、屈託のない笑い声。薔薇のような唇は平穏なる色彩に彩られ、夕焼けのような頬は赤々と燃え立っていた。その一方で、もしも涙が流れ零れる時があるならば、それは常に可愛い小姓の水色の瞳からなのであった。令嬢たちはとても美しく、しかし無慈悲であるから決して泣くことはないのだ。彼女たちはただ笑い、愛情を示し、そして苦しめることしか出来ないのだった。

ここ数日と言うもの、グリーシュカの頭は魅惑的で美しく幸福な国についてと、賢い人々についての空想によって占められていた。彼の空想の中の賢い人々とは、もちろん、この監獄の如き退屈な家や、痩れた通りや横町、退屈な北の首都で彼が見るような人々とは異なっていた。そう、彼は一体ここで何を見ただろうか？　彼が空想するような美しい令嬢は、ここにはいない。上流階級の奥様と令嬢たちは尊大で優美さを欠いており、庶民階級の奥さんと娘たちと来たら、耳をつんざく声で難癖を付けたがり、意地が悪かった。騎士や小姓もまた存在しはしなかった。自分の仕える令嬢の花をあしらったスカーフを身に付けている者はいないし、弱き者のために誰かが巨人と戦うなどといった話も聞こえない。グリーシュカの暮らすここの上流階級の人間は不愉快で金所金所しくて乱暴か、むしろ嫌らしいほどに優しいかであった。一方の庶民階級の人

間達もまた乱暴で余所余所しかった。彼らの単純さは恐ろしいほどで、ずる賢さと同じくらいに理解の不可能な人間の複雑さを見せていた。

　グリーシュカがここで見るものの全てが彼にとっては気に入らず、その繊細な心を傷つけるのだった。自分自身の名前ですらも、彼は好きになれなかった。思いがけず優しくしようと思い立った母親が彼をグリーシェンカとの渾名で呼び始めた時ですら、この甘美な名前は全くもって彼の気に入らなかった。母親、女主人、彼女の娘たち、庭の子ども達によってグリーシュカに与えられたこの馬鹿げた呼び名を、彼は自分のものとは思うことが出来なかった。彼が考える自画像とは決して結び付かなかったのだ。彼の頭に時折浮かぶのは、貼り付けの悪いラベルがワインの瓶から剥がれるように、この呼び名もまた彼から剥がれ落ちるのだ、との想像だった。

## 2

　アヌーシュカは食器を窓台の上に置きたいと思った。その大きくガサガサした手で、踝で細くなったグリーシュカの二つの脚を掴み、彼を窓台から引っ張ると、理由もなく乱暴に言った。
「窓全体にこんなに長々と横たわって。お前がいなくとも狭くて、一つも置く場所がないってのに」
　グリーシュカは窓から飛び降りた。彼は驚いて、台所のペチカの熱気のせいで真っ赤になった痩せて厳めしい母の顔と、剥き出しにされた腕の赤い肘を見た。台所の中はムッとするような煙が籠もっていた。レンジの上では何かがしゅうしゅうと音を立てて煙を吐き、苦く焦げ臭い匂いがしていた。階段へ通じるドアは開いていた。グリーシュカはドアの近くにしばらく立ち止まり、母を見ていた。その母親は、ペチカの近くであくせくと働いており彼の方を見てはいなかった。それから彼は階段へと出た。足の下にごわごわしたゴミだらけの階段の床を感じた。そして自分の頭が痛みグルグルと回ること、心臓が一瞬停まりそうになり、身体全体に熱の時に独特なけだるさが広がっていることに気が付いた。
　「煙がたくさん入ったんだ！」と、彼は考えた。
　なんとはなしの当惑と共に彼が眺め回したのは、石造りの灰色の階段だった。それはでこぼこでゴミだらけで、小さな踊り場を伴って上下へと伸びていた。 彼はその踊り場で立ち止まった。彼らのドアと踊り場を介して向かい合う形で、もう一つのドアがあった。それはぴったりと閉ざされてはいたが、その向こう側から二つのよく響く女の声が聞こえた。誰かと誰かが罵り合っている声だった。言葉たちは散らばった。それはまるで不用心にも締めが甘い吊り下げランプから落ちる鉛の雫のように。その言葉たちは、見ず知らずの人たちの乾いた台所の床を素早く走り回っては、琺瑯鍋や鉄鍋にぶつかり音を立てているのだと、グリーシュカにはそう思えた。たくさんの言葉たち、その全てが合わさり一つの甲高いざわめきへと化した。ただ浮かび上がっているのは、罵りの単語だけ。グリーシュカは悲しげに唇を歪めた。彼は知っていた。この家の中では常に口喧嘩が繰り広げられ、意地の悪くて泥だらけの子ども達は頻繁に殴られているのだった。台所にあるのとそっくりなその窓から見えるのは、あまりにも窮屈で物悲しい世界だった。赤い屋根、黄色い壁、埃っぽい庭。その全ては奇妙で、他人事で、不可思議であり、可愛らしくて愛おしい空想の姿とは少しも似ていなかった。
　グリーシュカは窓台のすり切れた板の上によじ登り、開かれた窓枠の一つに背中をもたせた。しかし庭は見なかった。彼の前に広がっていたのは、明るく飾られた宮殿であった。彼の前に大きく開かれたのは、亜麻色の巻き毛の王女ツランディナの部屋へと繋がるドア。彼女は高く細い窓の近くで細い亜麻を綯っていたが、 開かれたドアの音に振り返り、すらりとした白い腕でぶんぶんと音を響かせる糸車を止めた。彼を眺めて優しく微笑み、こう言った。
「私の方へもっと寄っておいで、私の可愛い少年よ。私はずっと前からお前を知っていてよ。怖がらないで、近くにおいで」
　グリーシュカは近付くと、彼女の足下近くに膝を付いた。彼女は問うた。
「お前は知っていて？　私が誰なのか」

　彼女の金の響きの声に魅了され、グリーシュカは答えた。
「知っています、君は、とても美しい王女ツランディナ。この国の大いなる王、賢明なるツランドナの娘」
　陽気な王女ツランディナは笑って言った。
「お前はそう、知っている。だが全てではない。私は父、賢明なるツランドナから魔法の使い方を学んだのだよ。だからお前に対して望むことが出来る。私がお前で遊びたいと思えば、 お前に魔法の言葉を放てば良いのだ。するとお前は誇り高い宮殿、お前の父の元から立ち去り、――ほらご覧、お前は自分の本当の名前を忘れ、料理女の息子、グリーシュカと呼ばれている。お前は忘れたのだ、お前が誰なのか。そして私が望まぬ間は、思い出すことはない」
　「僕は一体誰なんだ？」　グリーシュカが尋ねた。
　ツランディナは笑った。彼女の矢車菊のような青い眼の中に、衰えを知らぬ魔女の若い目の中にあるものと同じく意地の悪い炎が燃えていた。ツランディナの細い指が、グリーシュカの細い肩を強く握り締めた。
　彼女は言った。まるで小さな街の普通の女の子のような声音で、彼をからかって。
「でも言わない！　絶対に言わないわ！　自分で気が付けばいいのよ！　言わない！　言わないったら！　自分で気が付けないのなら――グリーシュカのままね。聞こえるでしょ、料理女のアヌーシュカがお前を呼ぶのが。行ってしまえ、彼女の腕にキスをするんだ。早く行かないと、彼女がお前を撲つよ」

　グリーシュカが耳を澄ませると、――台所から聞こえていたのは、嗄れた母親の声だった。
「グリーシャ、グリーシュカ、この暴れん坊め、どこに消えちまったんだ？」
　グリーシュカは慌てて窓台から立ち上がり、台所へと飛び込んだ。彼は知っていた。母親に呼ばれたのなら、ぐずぐずしてはいられない。でないと叱られるのだ。ましてや今、食事の用意の時間、とりわけ台所が煙たく息苦しくなる時には、母はいつだって癇癪を起こすのだから。光に満ちたツランディナ王女の部屋がその輝きを失って行く。グリー シュカに向かって流れてくるのは、台所の青い煙。グリーシュカの頭はすぐに再度痛み始め、またグルグルと回り始めた。再び彼は苦しくなり、吐き気がした。
　母は彼にこう言いつけた。
「とっととやるんだよ。ミリガンのところまで急いで走って行って、レモンのラスクを半フントとケーキを六十カペイカ分だけ買っておいで。早く。今、お茶を出さなくちゃならないんだよ、奥様のお客様に。誰だか知らないけれど、時間外れの間の悪い時に来やがって」
　靴下と短靴を取るために、グリーシュカは反射的に廊下へと向かおうとしたが、アヌーシュカはそれに腹を立てて怒鳴った。
「なんて無駄なことを！　長靴を引っ張ってどうするんだい！　時間がないんだ、走るんだよ――大急ぎでね！」
　グリーシュカは硬貨、銀のルーブル、を掴むとそれを熱い手で握り締めた。帽子を被り、階段を駆け下りる。走りながら考えるのは、「僕は一体誰なのだろう？　どうして僕は自分の本当の名前を忘れ去ってしまったのだろう？」ということだった。
　いくつかの通りの向こうまで、長い距離を走らなければならなかった。それと言うのも、この横町の反対側にある近いパン屋ではなく、別の遠くのパン屋でラスクとケーキを買うようにときつく命じられていたからだ。近くのパン屋は酷く不味くてハエの糞だらけだが、遠くのパン屋はとても素晴らしく美味しい上に清潔だと、そう女主人が考えていたからだ。
　「僕は一体誰なんだ？」　グリーシュカは執拗に考え続けていた。
　この忌まわしい問い掛けにより、美しきツランディナの空想が現れた。彼は軽快な足で騒がしい通りのゴツゴツした歩道を走りぬけた。見ず知らずの他人と出くわし、どこかへと急いでぶつかり合い、グリーシュカの水色の更紗のシャツと短い青色のズボンとを軽蔑的にちらりと見やるこの大量の不愉快な人たちを追い抜きながら、グリーシュカは再び不思議で奇妙なものを感じていた。それは、とても美しい令嬢のことを空想し、多くの愛すべき物語を知っている自分が、他ならぬこの地、灰色でざらついた町で暮らし、他ならぬここ、ムッとする煙が充満する台所で育っているということだった。彼にとってこの場所はとても奇妙で、自分とは縁遠いものに思われるのだった。
　グリーシュカはこの家で起こったここ数日のことを思い出した。二十四号室の大尉の息子ヴォロージャは、反対側の棟の二階の彼らの部屋近くの階段に座って少しおしゃべりしようと、以前からしつこく彼を誘っていた。ヴォロージャはグリーシュカと同じ歳であった。彼は元気で愛

想の良い少年だった。窓台に座って少年たちは楽しく話し合った。突然ドアが開き、ヴォロージャの母親である不機嫌な大尉夫人が戸口から顔をだした。突然のことに怖気づいたグリーシュカを、目を細めて頭の先から足の先まで見ると、蔑み、わざとゆっくりと言ったのだった。
「一体何事なの、ヴォロージャ？　この裸足の少年がお前のお仲間だっていうの？　部屋に行きなさい。今後彼とのお付き合いは禁止です」
　ヴォロージャは赤くなり何かを言いかけたが、しかしグリーシュカはもう自分の居場所、つまりは台所へと駆け出していた。
　今、通りで彼は考えた。「ありえない、全くその通りだなんて。そんなわけがない。僕が本当に本当のただのグリーシュカ、料理女の息子に過ぎなくて、だから、大尉や将軍の息子達、良いところの子供たちと付き合ってはいけないだなんて」。
　彼は遠くのパン屋で命じられた通りの買い物を行った。決して彼に供されることのないものを買ったのだ。帰りの道でグリーシュカはとても綺麗なツランディナ、賢明であり残酷でもある、その彼女の空想を始めたが、それは彼を取り巻く奇妙な現実に立ち戻すのであった。こんな疑問が浮かんだ。「僕は一体誰なんだ？　僕の本当の名前は何なんだ？」
　空想の中の彼は、一一王の息子であった。彼の一族の住まう誇り高き豪邸は、とても美しく遠い国に建っていた。彼はずっと前に重い病に掛かってしまい、以来、静かな寝室で眠っていた。彼の上には金の天蓋が掛けられ、その寝床は柔らかい羽毛が入っており、軽い繻子のカバーで覆われていた。彼は自分を料理女の息子グリーシュカだと思い込み、譫言を口にするのだった。
　彼の寝室の窓はすっかり開け放たれていた。病人の元に時折運ばれて来るのは、開いた薔薇の甘い匂いと、恋するナイチンゲールの声、真珠の噴水の水の音。寝床の枕元では彼の母親である王妃が付き添い、泣き、自分の息子を撫でていた。王妃の瞳には優しさと悲しみがあり、彼女の手は柔らかだった。それと言うのも、彼女は料理もしなければ縫い物もせず、洗い物だってしないからだ。愛らしい母親である王妃が何かを作るとしても、それは色とりどりの絹糸を使って金のカンバスで繻子のクッションを刺す程度なのだ。彼女の柔らかい指が育て上げ るのは、赤い薔薇と白い百合、そして長い派手な尾を持つクジャクであった。母王妃は、可愛い息子が重い病気であることに涙した。その彼は病気のせいで曇った瞳を時折開いては、奇妙な言葉で理解の出来ない何事かを呟いているのだった。
　しかしその日が来れば、王妃の息子は目を覚ます。豪華なベッドから立ち上がり、生まれ故郷での自分の名前を思い出すのだ。そして笑い始めるだろう。

　グリーシュカはここまで思い描くと楽しくなった。彼は更に早く走り出した。周囲のことは何も目に入っていなかった。突然の思いがけない衝撃が、彼を現実に戻した。彼は何が起こったのか理解するよりも先に、ただ驚愕した。
　彼の腕から買い物袋が滑り落ちた。薄い紙が裂け、散々に打たれ汚れた灰色の歩道の石畳に、黄色いレモンのラスクが散らばった。
　「嫌な子だね、笑いながら押して来て！」と、金切り声でグリーシュカを叱りつけたのは、背の高い太った婦人だった。彼がぶつかった相手だ。
　彼女からは嫌な匂いがした。その怒った小さな目の近くに、嫌な鼈甲の眼鏡があった。彼女の顔の全てが不快で不愉快で怒りっぽくて、グリーシュカに恐怖と憂いとを抱かせた。グリーシュカは驚いて婦人を見はしたものの、何をすべきなのかは分からなかった。門番や巡査などの、恐ろしくてよく分からない存在が、あらゆる方角からやって来ては今にも彼を逮捕して、どこかに連れて行くのではないかと思われた。
　婦人の隣には若い男がいた。シルクハットに嫌らしいまでに黄色い手袋といった、あまりにも洒落すぎた服装をしていた。彼は酷く怒っており、出っ張った赤い目でグリーシュカを見やった。彼の全身は赤く、悪意に満ちていた。
　「下劣なごろつきめ！」と、彼は歯の間からわざと嫌らしく言った。
　彼は横柄にグリーシュカの帽子を叩き落とすと、彼の耳を強く数度引っ張った。それから顔を逸らし、婦人に言った。
「行こうよ、ママ。こんなクズと関わり合いになるのも嫌だ」

　「それにしたって不作法な子供だこと！」と、グリーシュカから目を逸らしながら婦人はぶつぶつと言った。「汚い貧乏人のくせに、人のことを押してくるんだからね！　全く冗談じゃないよ！　通りを安心して歩くことすら出来やしない！　警察は何を見ているんだか！」
　婦人と若い男とは怒りのままに二、三の会話を交わしつつ、遠くへと去って行った。グリーシュカは自分の帽子を拾い上げ、レモンの黄色いラスクを拾い上げるとボロボロの紙袋の中に何とかして押し込んだ。そして家へ向かって走り始めた。彼は恥ずかしくて泣きたかったが、けれども泣き出しはしなかった。彼はもうツランディナを思い描くことはなかった。だが考えた。「彼女はとても意地が悪い。ここの人と全く同じだ。彼女は僕に恐ろしい夢を与えた。そのくせ、 僕をこの夢から決して目覚めさせてはくれないんだ。僕は一生思い出せない、僕の本当の名前を。決して分からないんだ、本当は自分が一体誰なのか」。
　自分は一体誰なのか？　未知なる意思により未知なる目的のためにこの世に生み出された私は、一体誰なんだ？　もしも私が奴隷ならば、他人を非難し有罪だと定めるこの私の力は、どこから来たのだろう。私の傲慢なるもくろみはどこから？　もしも私が奴隷よりも幾分上等な存在だとするならば、何故私の周りの世界は悪の中に微睡んでいるのか。この醜く、偽善的な世界は。
　笑っている。哀れなグリーシュカを、彼の空想を、彼の空虚な疑問を。残酷な、しかしとても

美しいツランディナが。

# 満たし得ぬもの

http://p.booklog.jp/book/90190

著者：春色
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kkkate0303/profile
ブログ：http://kkkate0303.blogspot.com/

出典
БИБЛИОТЕКА РУССКОЙ КЛАССИКИ

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/90190

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/90190

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ